

桐壺更衣の人物像を探る—『源氏物語』桐壺巻と「長恨歌」との読み比べ—

Searching for the Image of the Person Appearing in the Kiritsubo Consort:

Comparison of Reading Between “Genji Monogatari” Kiritsubo Book
and “Chang hen ge”

古屋 明子

Akiko FURUYA

キーワード：桐壺更衣、楊貴妃、弘徽殿女御、形容詞、和歌

Keyword: Kiritsubo Consort, Yang Guifei, Kokiden Consort, adjective, Waka

1. はじめに

『源氏物語』桐壺巻は、今までと同様、高校の「古典探究」（第一部）の教科書5社中「光源氏の誕生」「光源氏誕生」「光る君誕生」（5社）全てにおいて取り上げられている。その他、「藤壺の入内」（2社）があり、桐壺更衣との死別の場面は「飽かぬ別れ」（1社）があるのみである。

高等学校における桐壺巻の授業では、本文の読解を中心にしたものが多い。主人公光源氏登場の際の境遇の一つとして桐壺更衣や他の女御・更衣の各人物像を追究するもの⁽¹⁾、登場人物間（桐壺更衣と周囲の人々）や人間と組織・制度・社会・思想（桐壺帝のあり方、桐壺更衣と弘徽殿女御側、皇位継承等）、登場人物の内面（桐壺帝の内面）それぞれの「対立構造」に着目しながら桐壺帝の人物像を考えるもの〔グループ学習〕⁽²⁾、三谷邦明氏の論（『入門源氏物語』ちくま学芸文庫1997年）を基に、作品名の意味や作品の背景、冒頭の一文に着目させ今後の

『源氏物語』学習に対する意欲を高めさせるために、発問を工夫したもの⁽³⁾、現代語訳・音声・絵巻・映像を用いて「桐壺更衣を死に追いつめたのは誰か」という課題をジグソー法（「帝」「弘徽殿女御」「他の女御・更衣たち」「上達部・上人」のエキスパート班とジグソー班）で追究するもの⁽⁴⁾、更衣の死の場面で「いとかく思ひたまへましかば」と反実仮定の省略されている部分を考えるもの⁽⁵⁾等がある。

一方、大学における桐壺巻・若紫巻の授業では、本文の他に、多くの資料を活用したものが多い。土佐光吉「源氏物語絵色紙帖」（「源氏物語絵画帖」とも、京都国立博物館蔵）を用いて源氏絵の歴史を丁寧にとどめた上で、『伊勢物語』『源氏物語』各絵の垣間見の6場面を用いて本文と読み比べた絵解きや垣間見場面の動画作り、桐壺巻冒頭の現代語訳・本文・英訳・注釈から2つを選び読み比べ多様な解釈の発表という3つのアクティブ・ラーニングを行い深い学びに結びつけていくもの⁽⁶⁾、平安後期

から江戸後期に描かれた源氏絵（桐壺巻は、桐壺帝が高麗人に光源氏を観相させる場面、桐壺帝が光源氏と藤壺を引き合わせる場面）を読み解きながら、源氏物語の世界観等に触れ、古典に親しむ態度を身に付けるもの⁽⁷⁾、漫画「あさきゆめみし」（桐壺・若紫）の部分読みを通して漫画家の創意にせまるもの⁽⁸⁾等がある。

そこで、まず、新学習指導要領（平成29・30年告示）国語科「読むこと」の言語活動における比較読み（小学校第5・6学年、中学校第3学年）や読み比べ（「言語文化」「古典探究」）を踏まえ、『源氏物語』桐壺巻と『白氏文集』「長恨歌」との読み比べを通して楊貴妃の人物像との比較により、桐壺更衣の人物像を捉える。次に、周囲の評価ではなく、桐壺更衣自身の真情が吐露された歌にも着目して、その人物像をより深く考えていくという方法をとった。そうして人物像を捉えた上で、そのように造型されている理由とそう考える根拠も考察させた。まず、以上のような登場人物像の読解を深める手法の効果について述べる。

大学生の学習形態であるが、個人→グループ→個人という形で読解を深められるようにした。予習として、桐壺巻前半を読み桐壺更衣の人物像とそう考える根拠を個人で考え書いてくる。授業では、予習の発表、「長恨歌」との読み比べを行った後、桐壺更衣の歌の解釈をグループで話し合い、発表した。各グループの意見を聞いた後、再度個人で、桐壺更衣の人物像、そのように造型されている理由を考察した。時間内に書き終わらなかった学生は次時までの課題とした。予習でも復習（課題）でも自主的に色々調べた上で課題を提出した学生も何人かいた。次に、以上のような学習形態の変化の効果について述べる。

2. 『源氏物語』桐壺巻の先行研究について

『源氏物語』桐壺巻は、『無名草子』にも『桐壺』に過ぎたる巻やはべるべき。」と述べられ、巻自体が一つの特色ある世界を形成し物語全体を映す小宇宙として、源氏物語の表現・方法・主題・構成・構造・意識・思想等々あらゆる問題を単純ではあるが明瞭に完結した姿で提供している⁽⁹⁾、と言われている。そのような桐壺巻の先行研究は膨大にあるものの、桐壺更衣の人物像に関する研究は、他の登場人物のそれに比べて少なく、人物論としてよりも役割論の傾向が強い⁽¹⁰⁾。「悲劇のヒロインとして固定化」されてきた桐壺更衣を現代の大学生がどのように受け止めるのかについて筆者は非常に興味があるので、桐壺更衣に関する問題点について相反する二つ以上の論を

提示した上で考察させた。

(1) 女御と更衣について

高等学校では帝の妃の位に上から中宮（一人のみ）—女御—更衣というものがあり、その位は女性の父親の権勢により決まると習ってきたと思われる。増田繁夫氏によると、延喜式等より現実では「更衣」とは天皇の妻であり女官以上の待遇を受けている人の通称で一つの殿舎を局に賜る女御とは大きな格差があるのに対して、『源氏物語』の桐壺更衣は桐壺を賜る等破格の待遇を受けている⁽¹¹⁾、という。

これらを踏まえて授業では、女御と更衣の間には大変な格差があること、だから桐壺更衣を寵愛する桐壺帝の行為は大変な非常識であり、有名な冒頭の一文よりこれから波瀾万丈の物語が始まることを確認した。

(2) 桐壺更衣の人物像について

①形容される古語より

神尾暢子氏によると、桐壺更衣は内的な「心ばせ」、外的な「さまかたち」等作者が抽象的な美女、理想的な女性として設定しており、「にほひやかなり」「なだらかなり」「うつくしげなり」「らうたげなり」等周囲の人々の主観世界で把握される女性であるとともに、消極的で脆弱な女性美を印象づける用語選択でもあり、源語展開の端緒を体現する、類例のない絶対的女性である⁽¹²⁾、という。

授業では、桐壺更衣を形容する語は、桐壺帝を初めとする周囲の人々の見解がほとんどであることに注意させながら、まず、これらの古語の意味を一つ一つ確認させた。

②本文の楊貴妃より

玉上琢彌氏は、楊貴妃は太液芙蓉未央柳に喩えることができたが更衣は喩えるものがないことを、唐絵に満足せず大和絵を生んだ心、漢詩文だけに満足せず違ったものを仮名文で作ろうとする作者の精神である⁽¹³⁾、という。また、神尾暢子氏は、楊貴妃や葵の上が「うるはし」と評価されるのに対して、源語で急増した形容詞「なつかし」を楊貴妃以上の女性美表現と設定したところに、作者の主張が看取される⁽¹²⁾、という。

授業では、日中の文化比較には言及せず、楊貴妃の「うるはし」と対比させながら、桐壺更衣の「なつかしう、らうたげなり」に着目させた。

③「長恨歌」の楊貴妃より

三谷邦明氏は、長恨歌では書かれなかった楊貴妃の栄華と重なった苦悶を桐壺更衣の内部としたところに源氏物語の出発点があったとし、長恨歌と伊勢集の影響を強く受けている桐壺巻は、両者の共通点である哀悼・追憶

の悲愁を描いた作品である⁽¹⁴⁾、という。

一方、三田村雅子氏は、「楊貴妃のためし」という物言いは帝の目には可憐なだけの女と見えた更衣にひそむ権力の野望と妖婦性を強調する解釈の可能性があり、亡き父按察使大納言の遺言や母北の方の回想より、桐壺更衣も彼女なりの誇りと意地と家の遺志を背負って度重なるいやがらせにもしぶとく耐えてきたに違いない⁽¹⁵⁾、という。藤井貞和氏も、「楊貴妃のためし」は「長恨歌」全体を表し、詩人白楽天は帝の楊貴妃への溺愛がやがて国難を呼び入れた次第を綴ったのであり、それなくしては哀話のイメージすら醸し出されることがなかった、という。

また、河村幸枝氏によると、「楊貴妃の例」には日本的な政治のかけひきが示され、人物造型と物語の展開に深くかかわる政治は「長恨歌」の引用により語ることができることは確かであるが、当時流行した長恨歌説話は、美化、浪漫、神仙の方向へ流れたと推測され、伊勢が宇多帝に献上した和歌十首はどれも、玄宗と楊貴妃が死別した後の互いに呼び合う想いを悲しく美しく歌い上げたものばかりなので、『源氏物語』作者は「楊貴妃の例」といえばこの伊勢の和歌に詠まれた楊貴妃を思い浮かべると計算したのではないか、という。つまり、桐壺更衣哀史では、「長恨歌」を引くことによって、より具体的な政権抗争を描くことに成功し、桐壺更衣への迫害、すなわち、後に続く賜姓源氏の王権奪還の執念の物語を必然化していくと同時に、その生臭さをカムフラージュして読者の乙女チックな嗜好を満足させているのである⁽¹⁷⁾、ともいう。高橋亨氏も、「楊貴妃の例」は白居易「長恨歌」をはじめとする長恨歌説話によるもので、「楊貴妃の例」とは玄宗皇帝の異常な寵愛が原因となって国家が争乱の危機に至ったことであり、長恨歌の引用の意味は、恋愛が権力と不可分に結びついていることの表現の方法であり、長恨歌を国が乱れる負のイメージと捉える周囲の人々と恋と死別の叙情の相で捉える帝とが語られるのは同時代の一般的な長恨歌の享受のしかたである⁽¹⁸⁾、という。

④本文の弘徽殿女御より

その他、玉上琢彌氏は、貴妃は皇后に次ぐ高い地位、群小を圧する身分であり、「才智明慧善巧便佞」（「長恨歌伝」）の強引なゆき方をする楊貴妃の身分と性格は、弘徽殿の女御に似ている、ともいう。

授業では、河村氏の論に基づき、「長恨歌」の楊貴妃引用により、政治性と浪漫性が表されることを示した。

⑤白居易の「李夫人」、陳鴻の「長恨歌伝」あるいは「漢書外戚伝」の李夫人より

新見一美氏によると、美女の平生の美と病時のやつれ

とを対比して描く表現は、漢書外戚伝の李夫人の描写にも見られるので、桐壺更衣像は楊貴妃のみではなく、李夫人の姿を加えて造型されている⁽¹⁹⁾、という。

授業では、「長恨歌伝」の影響も指摘されているが、それによって楊貴妃の政治性が強調される⁽²⁰⁾という説明程度に止めた。

⑥桐壺更衣の和歌より

小町谷照彦氏によると、間近に迫っている死を予感して、なお帝のために生きたいという願望、もはや二度と会うことはあるまいという別離の悲哀、思うままに心中を吐露できない周囲への配慮など、錯綜し重層した感情が描かれている⁽²²⁾、という。武谷恵美子氏も、更衣の迫り来る死を自ら悲しむのではなく、今を最後として帝と別れねばならないことこそが悲しいのであり、帝の心を真直に受けとめる更衣の激しくもはかない歌である、という。また、秋本宏徳氏も、帝の言葉は極めて贈歌に近く更衣の歌は返歌であり、悲嘆に取り乱す帝を眼前にして更衣の心中を占めているものは、故大納言の遺言や皇子の将来のこと（政治的な思惑）よりも、帝への思い（や幼い皇子を残す心許なさ、母としての自然な感情）である⁽²⁴⁾、という。以上よりこの歌の解釈の一つ目は、帝の言葉を受けて、帝との別れの悲しみを詠んだ歌であるということになる。

一方、藤井貞和氏は、和歌の「生かまほし」との思いに、我子の立太子を見とどげえない無念、桐壺更衣一家の王権への意志が見られる⁽²⁵⁾、という。秋山虔氏も、帝と桐壺更衣との宿縁は、近代的な意味での純愛などと言う言葉では説明しきれず、大納言家の家門の意志、執念に支えられて、この更衣は宮廷世界に突き出された、という。以上より解釈の二つ目は、皇子の立太子、すなわち、大納言家再興を見届けられない無念を詠んだ歌ということになる。

その他、上野辰義氏は、帝との再会が永久にとざされると観念した別れに臨み、心から生きたいと自覚したという内容であり、この句の存在によって更衣は自分の人生を本当に自分のものにしようとする明確な自己の意志を有する女性となった⁽²⁷⁾、という。また、高橋亨氏は、更衣の歌は帝の言葉にある「限り」「道」「行き」を贈答歌のように受け、贈答歌の発想をもとになされた独詠であり、無明の闇に惑い、現世への執着にとらわれた源氏物語の初めの歌は贈答関係を歌物語的な抒情の場として完結させないことによって長編的な物語を展開する主題性をもちえた、⁽¹⁸⁾という。

授業では、独詠か贈答か様々な説があるという程度の

説明に止め、更衣が何を思って生きたい、無念であると言ったのかという点について、先の二つの解釈を紹介しながら考えさせた。

3. 『源氏物語』桐壺巻の授業の概要

(最初のオリエンテーションに関わる部分は省略した)

(1)授業名 大東文化大学 令和4年度教科教育法(国語)1A 『源氏物語』桐壺巻の授業について

(2)実施時期 令和4年度前期 4月12日(火)

(3)対象学生・学部学科 クラス1(文学部日本文学科2名、文学部中国文学科15名)、クラス2(文学部教育学科1名、外国語学部日本語学科16名)計34名

(4)教材 『源氏物語付現代語訳 第一巻 桐壺～若紫』玉上琢彌訳注 角川ソフィア文庫、新編日本古典文学全集『源氏物語1 桐壺～花宴』(付録 長恨歌)

(5)目標

①古典の登場人物像を生徒が捉えるための様々なアプローチ方法(身分、形容する語、和歌、弘徽殿女御との比較、楊貴妃との比較、「長恨歌」との読み比べ)を理解する。

②桐壺更衣の人物像とどのように造型されている理由を、それぞれ根拠を挙げて考える。

(6)授業の進め方

《予習》

①本文(桐壺巻前半)を読み、桐壺更衣の人物像とそう考える根拠を考えてワークシートに書く。

《授業》

②本時の目標を知る。

③予習(桐壺更衣の人物像等)を発表する。

④PPTや教材を見ながら、桐壺更衣の人物像を探る様々なアプローチ法を知る。その際、桐壺更衣自身の言動の描写は少ないことを確認する。

⑤教材「長恨歌」と読み比べながら、楊貴妃の人物像を知る。

⑥桐壺更衣の歌を鑑賞し、彼女が生きたい、無念だと思う内容をグループ(4人、役割:司会・発表・用紙記録・発表画用紙記録)で話し合い、画用紙(板磁石付き)を用いて発表する。

⑦各グループの発表を参考にして、桐壺更衣の人物像とそう考える理由を、再度考えてワークシートに書く。

⑧まとめを聞く。

《復習》

⑨桐壺更衣の人物像がどのように造型されている理由とその根拠を考えてワークシートに書く。

4. 学生の反応と指導の成果

(1)自己評価より(2クラス出席32名)

①前・後各学期の授業目標・内容や評価方法等への理解	できた78.1%・まあまあ21.9%・できなかった0%
②「教科教育法(国語)」で学ぶ内容への理解	できた84.4%・まあまあ15.6%・できなかった0%
③PPT使用の自己紹介や模擬授業の各方法への理解	できた68.8%・まあまあ28.1%・できなかった3.1%
④『源氏物語』桐壺巻前半と「長恨歌」を読み比べ、共通点・相違点の理解	できた21.9%・まあまあ59.4%・できなかった18.7%
⑤楊貴妃、桐壺更衣、弘徽殿女御各人物像への理解	できた31.3%・まあまあ62.5%・できなかった6.2%
⑥楊貴妃や弘徽殿女御と対比させて描かれる桐壺更衣の人物造型方法や機能についての理解	できた31.3%・まあまあ56.3%・できなかった12.4%

予想通り、教科教育法(国語)の学習内容等への理解度の高さに比べて、『源氏物語』桐壺巻や「長恨歌」の読解への理解度は低い。これは、予習の有無による読解の格差のためでもあるし、読み比べや造型方法・機能に関するまとめをきちんと行うことができなかったためである。また、日本文学科の学生が少ない中で、内容が難しかったのかもしれない。学生の自由記述でも触れているのだが、アプローチ法への理解を聞かなかったのもよくない。しかし、人物像に関して理解の数値がやや高いのは、予習の成果であるとも言える。

吉海直人氏は、桐壺巻は叙情的な「長恨歌」を引用することによって覆い隠されており、また読者は桐壺帝の心情に同調することによって、一方的に可憐な桐壺更衣像を幻想させられる⁽²⁸⁾、という。兼坂壮一氏も、帝の行為の元をたどれば摂関政治体制から解き放たれた理想的な天皇親政復活のためにあえて身分の低い女性を選んだとも言えるし、更衣側としても明石一族につながる父大納言家の期待を一身に受けて入内してきた女性という意味で、この二人の恋愛を純粋な意味での純愛と呼べるかということには疑問が残る⁽⁴⁾、という。ところが、高校生や本校の大学生は、身分や立場をなげうった激しい純愛と捉えていた。

兼坂氏の高校の授業事例では、桐壺更衣の「いとかく思ひたまへましかば」後の省略されている部分について、

「こんなことになるならば、愛されない方がよかった」という意見は「女もいとみじと見たてまつりて」や辞世の句の内容から適切ではないという意見が多く、また、「もっと皇子のことを頼んでおけばよかった」という意見は切羽詰まった場面で打算的すぎるという意見があり、「積極的に愛したかった、愛し合いながらもっと一緒に生きていたかった」という意見もあったので、答えは限定せずそれぞれ根拠を述べさせるにとどめたという。

本校の大学生も、「長恨歌」からは悲恋を読み取り、楊貴妃や弘徽殿女御との比較からも桐壺更衣のはかない美しさを桐壺帝らの目線で読み取り、本文に全く書かれていない皇子を思う母性にまで言及していた。政治的側面を読み取らない理由として「例え桐壺更衣が生きていたとしても、父大納言が亡くなりしっかりした後ろ盾がない中で、立太子や大納言家復活など不可能に近い」ことを挙げていた。そこで、予習・授業・復習それぞれの大学生の意見を詳しく見ていき、彼らの読解の特色と指導の成果について述べる。

(2)《予習》桐壺更衣の人物像 I (25名/34名提出 73.5%)

次のA～Fは学生の意見の内容（複数解答有り）により分けたものであり、まず、人物像を中心に述べる。

① 桐壺更衣の人物像（複数解答有り）

A 身分が低い人（10名）

これというしっかりとした後ろ盾がない人/身分は高くない人（10名）

B 周囲にいじめられ病弱な人（12名）

他の女御や更衣にいじめられている人/妬みそねみに気を病む人/特別心が強い人ではなく普通の人/病弱で心が弱い人/傍く線が細く不憫な人/かわいそうな人/亡くなるまで周囲に妬まれ続け周りに評価されることがなかった不憫な人/光源氏が3歳の時に病気が原因で亡くなった人/味方が少ない人/気が弱く断れない人

C 一途に貫く強い人（7名）

桐壺帝に対して一途な人/帝と愛し合っている人/いじめにくじけない気高い精神をもっている人/表向きや上面の強さではなく真から強く思ったり感じたりした事を周りに何と言われようと貫く心をもつ人/自らを奮い立たせられる人/しっかり者/強い人

D 寵愛される魔性の女（11名）

桐壺帝に溺愛されている人/当時の「女性」における最大の魅力をもつ男性の理想像だが異端の人/寵愛のせいで息苦しい思いをしている人

E 可憐で控えめな人（21名）

気立てが穏やかで角がなく憎めない人/とても美しく可愛らしい人/控えめで感じの良い優しい人/常に周りを心配する人/性格が良い人/謙虚で気を遣う人/性格が可憐で情が細やかな人/やや小柄で力が弱く守りたくなるような感じだが息をのむほど美しいわけではなくどちらかというと可愛らしい小動物のようで性格は控え目で自信もなく周囲への影響力も小さい人/聡明で美しくはかない人

F まあ良い人（1名）

悪い人ではない

② 弘徽殿女御と比べて

《桐壺更衣》

・身分が低い。(2名)・身分も母君としても弘徽殿女御より下。・第一夫人に比べると、発言権や存在がそこまで大きいわけではなく、気弱。

・身分が低くても態度や容貌から桐壺帝に寵愛されていた。・亡くなった後も桐壺帝が寵愛するほどの愛され方だった。

・弘徽殿女御らの妬みを受けても反発等はしない。・気が弱く病弱で感情的な人。

・気配りができる。・優しい。・性格が良い。・可憐で情こまやか、穏やかで角がなく憎めない態度や容貌が立派な人物。(5名)

・死にも動じないような愛の心をもっている。

・他人を蹴落として自分が上がろうとする気持ちがない・光源氏を皇太子にしたいという気持ちはなく、周りへの気配りを苦勞しながらもしている。(3名)

《弘徽殿女御》

・桐壺更衣に足りないものを全てもっている。

・身分が高い。・権力や立場がある。・格の高い住まいに住む。・他の方より先に入内し、父は右大臣、息子は第一皇子。

・身分が高くその家柄から桐壺帝に大切にされていた。

身分が高いからかわがままで性格が悪く、桐壺更衣に比べると人として劣っている。・何としても息子ともども上位にしようという野心を感じた。

・死にも動じないような冷徹な心をもっている。・性格が強く冷たい。・性格が強く理知的にすぎる人物。(4名)

・桐壺更衣をいじめている中心人物であり、桐壺更衣とは正反対の性格。弘徽殿女御の方が桐壺更衣に比べて容姿が整っておりいわゆるクールビューティな女性なのではないか。・桐壺帝に自身の産んだ第一皇子すら満足に愛してもらえず「死んだあとまで胸のおさまらないご寵愛ぶりなこと」と嫌みを言ってしまう。

・桐壺更衣と逆の人物。身分の上でも正統な立ち位置をもっているためであり、桐壺更衣の異常な綺麗さを引き立たせる存在でもあるため。逆説的には弘徽殿女御が普通の存在。

《二人は》

・対になるような存在。例えば、後ろ盾や気苦労をすらかしないか、桐壺更衣亡き後の評価等が挙げられる。対であるからこそ、お互いの存在が際立ち、人物が生き生きとしているように思われる。

本文（または現代語訳）中心に読んだであろう予習の段階での桐壺更衣の人物像であるが、桐壺更衣の美質への言及が圧倒的に多い（E）。その根拠として、桐壺帝の目線で語られる本文の形容する語句を挙げるとともに、死後桐壺更衣を評価する人々のことにも触れている。それに続くのが、他の女御や更衣から妬まれて病弱になった不憫な人（B）である。その根拠として、桐壺更衣が苦悩する様子を本文より挙げており、それがいっそう桐壺帝の寵愛を深めたとも言っている。桐壺帝に溺愛される男性にとって理想的な人（D）でもある。一方、控えめでか弱いだけではなく、最後まで帝への愛を貫いた真の強い人（C）という意見もあった。その根拠は、帝だけを頼りに後宮生活を続け、死ぬまでその姿勢を貫いたことである。辛さを堪え忍ぶのは、一途に帝を愛するがゆえであるにとらえていた。その他、身分制貴族社会の中で身分の低い桐壺更衣を愛する桐壺帝の非常識な言動を「異端」と捉える学生もいた。ともかく、そう考える根拠を挙げることで、本文を丁寧に読むことができたようである。

また、「長恨歌」や楊貴妃に触れている学生もおおり、傾国の美女に例えられるのはその妖艶さを印象づけたり、不憫さを増したりする効果があることを挙げていた。また、帝が魂の行方を気にすることに触れている学生もいた。

その他、弘徽殿女御との比較では、対照的に描かれるからこそお互いの存在が際立ち生き生きとしているという機能に言及している意見もあった。

《自由記述》

・予習したからこそ、グループで真剣に悩み意見を出すことができた。・予習が大切だと思った。・しっかり予習や復習をして学んでいきたい。

7割以上の学生が予習を行い、桐壺巻の本文（または現代語訳）を丁寧に読んだ上で、桐壺更衣の人物像をそう考える根拠も含めて考察することができた。また、予習をしてこなかった学生も、予習を踏まえた上で展開す

る授業を通して、その大切さを実感したようである。

(3) 《授業》桐壺更衣の歌（9グループ）

「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり」

【問い】「もっと生きたい」という歌だが、何が悲しい（無念な）のか、a 帝（皇子、母等）との別れ、b 皇子が天皇になる姿（大納言家の再興）を見られない、c その他 から選び、そう考える理由を書け。

【答え】全グループ a

[理由]・帝の言葉に対する返事であるから。

- ・純粋な愛があるから。
- ・死んだらもう会えなくなるから。
- ・子ども（光源氏）との別れ（2つの班）
- ・子どもの傍にいたかった。
- ・大納言家への思い入れが見られないから。
- ・政治に興味のある様子ではないから。

学生たちは、桐壺帝と桐壺更衣の純愛を中心に読んでいた。桐壺帝の言葉を用いながらの答歌のような桐壺更衣の独詠歌であるが、そこに贈答が存在し二人の心の交流を読み取っている。筆者が明示したせいもあるが、本文には一切書かれていない母親の皇子に対する愛情も想像している。また、故大納言や母北の方の思惑ではなく、桐壺更衣自身の大納言家への思いは書かれていないとも言っている。

《自由記述》

- ・桐壺更衣の和歌の内容について学べた。
- ・桐壺更衣の和歌にこめられた悲しい思いが分かった。
- ・桐壺更衣の和歌の様々な見方ができて面白かった。

桐壺更衣の悲しい思いを理解し、また、様々な解釈に触れる面白さには気づくことができたようである。

グループで意見をまとめて画用紙（板磁石付き）に簡潔に書き黒板に貼ってもらったのだが、もう少しじっくりと説明してもらえば良かった。しかし、グループ学習の効果は大いにあった。

《自由記述》

- ・グループで話し合いができて良かった。
- ・初めて読んだけれど、とても面白くてみんなの意見が分かれるので興味深い。
- ・グループワークを行ってそれぞれの考えを伝えた上で、みんなが納得する解答を導き出すことができた。
- ・今まではお互いうまく話せないことが多かったの

で、すごくいい経験で理解も深まった。

- ・まとめるのがやはり大変だった。文章の読解力をもっとつけたい。
- ・他の生徒の熱意に気圧されっぱなしだった。

実際に聞いていると、皆が意見とその根拠を出し合い、自身の読み方を披露し合っていることがよく分かった。

(4) 《授業》「長恨歌」との読み比べ

《自由記述》

- ・話（桐壺巻）の概要は知っていたがその中に楊貴妃が出てくることは知らなかった。楊貴妃が出てくることにより人物像や作中表現の解釈が大きく異なってくるのが分かった。
- ・長恨歌と読み比べたことでよりリアルな当時の環境を意識して考えられた。
- ・自分の想像以上に日本文学に中国文学の影響が見られることが分かった。

玄宗と楊貴妃に関わる部分に印をつけて、「長恨歌」の教材化を工夫したのだが、一読（筆者は書き下し文、学生は現代語訳）したのみで終わってしまった。が、学生は『源氏物語』とのつながりや楊貴妃と桐壺更衣それぞれの人物像を対比させて考えていた。しかし、楊貴妃は「傾国の美女」という受け取り方をした学生が多く、授業では楊貴妃の「麗質」「うるはし」の意味や花にも例えられない桐壺更衣の美質、玄宗との「比翼の鳥・連理の枝」には触れたのだが、それ以上深めさせることはできなかった。

(5) 《授業》桐壺更衣の人物像Ⅱ

次のa～cは、学生の意見の内容により分けたものであり、次に、そのように考える根拠を中心に述べる。

a 心優しい悲劇の女性/不憫な人（27名）

【理由】

- ・周りにいじめられ、妬まれ、病気で亡くなってしまった不憫な人という描写が数多く見られ、最後にまだ生きたいと願いつつ亡くなり、桐壺帝と皇子とも別れることになったから。
- ・容姿端麗で気立てもよく皇子までも生んだため、帝に寵愛され、亡くなった後も忘れられない存在、理想的な女性として描かれているから。
- ・桐壺帝が好む女性像に合っていたのではないかと。
- ・気を遣えて優しい更衣は、プレッシャーに感じることや苦しいことを帝には言わず、実家に帰る時も帝に引き止められ、感情がぐちゃぐちゃになり追い込まれ、死に

ゆくしかなかったと思う。今も昔も嫉妬という気持ちは変わらず悲劇に遭う人は今でもいる。だからこそ、辛いのに頑張っている人が一番かっこいいと思った。

・桐壺更衣の和歌の中に、別れを惜しむことが詠まれているから。

・和歌で生きたい気持ちを詠んでいるのに実家に戻り死を迎えているから。

・息子を大切にしていたから。主観だが、お腹を痛めて産んだ子を家の繁栄のために利用したいと考える人物ではない。

・妬まれていても寵愛をありがたく思って必死に頑張っているから。弘徽殿女御に対抗することもなく自分と光源氏を必死に守ろうとしている。特に大納言家再興を望んでいるようには書かれておらず、家族は大切だけれど、敵（弘徽殿女御ら）の反発で身内が傷つけられることを恐れているように思えた。

・帝の中にも美しい人だったと思いに残り、周りの人にとっては罪悪感が残る。

・桐壺更衣自身の描写が少なく、最後の言葉くらいしか自分から発したものがなく、人物像について周りの判断からしか想像できないから。

・弘徽殿女御との対立構図をはっきりさせるために、二人の性格描写を真逆にしたのではないかと。

・弘徽殿女御と比較することによって、読み手も桐壺更衣に惹かれる効果があるのではないかと。

・仮に桐壺更衣が大納言家再興を企んでいたのであれば、光源氏に対してそういった旨を伝える場面があると考えられるが、それが無い。

・桐壺巻の中で大納言家再興について触れられていないため。どちらかというと恋愛の話なので、更衣は再興を願っていないと思う。

・大納言家再興悲願の女性という見解もあると思うが、これは桐壺更衣自身の悲願ではなく、彼女の父（故按察使大納言）の悲願である。また、この悲願は彼と兄弟関係にあった大臣の息子「明石の入道」の娘「明石の君」が成し遂げているので桐壺更衣自体の人物像には重ならないと思う。

b 大納言家再興悲願の女性（1名）

【理由】

・周りからの嫌がらせや嫉妬によって心身共にストレスがたまっていたらう時に光源氏を出産するほど、強い心の持ち主であると思うから。夫と離れることも流産することもなく、愛に生きる強い人だと思う。可愛い、美しいというプラスとは反対のマイナスの出来事が多すぎ

る。

c 革新的な女性 (1名)

【理由】

・世間の人々が納得しがたいものに「先進的なもの」があると思う。今ならあらゆるものが AI に取って代わられる。紫式部は文学に精通した頭の良い女性で、男性を出し抜くことができ、常識を越えた身近なもの、今の AI のようなことが『源氏物語』で起こった。紫式部の時代に外れたスゴさを反映させて、どのように見られるのか、どうすれば時代を塗り替えるきっかけになるのかを表したのだと思う。

桐壺更衣の人物像は、「儂くも美しい不憫な人」というのが圧倒的に多かったが、予習時と同様、彼女の強さに注目している学生もいた。読解に正否はないと思うので、私も【理由】がきちんと述べられていればよしとした。授業や他の学生の意見を聞いた上で考えた人物像とそう考える理由は、予習時と比べて、より視野を広げて深い所まで考えられている。その理由として挙げているのが、周囲の目に映る桐壺更衣の描写の多さに注目しているものが多い。また、桐壺帝の心情に迫り、彼にとって更衣が理想的な女性であることに言及したものもある。また、弘徽殿女御との対比に気づいたものもある。桐壺更衣の描写の少なさにも気づいた上で、だから周りの評価で想像するか、唯一の歌やその後の言葉や様子の解釈をどのようにするかという方向性は見えたようである。大納言家再興の悲願は親戚である明石一族の繁栄によって達成されたとみる説があるが、描写がないので桐壺更衣自身は関係ないのではないかという意見には驚かされた。現代的な読み方もあるが、それはその都度、時代背景について指導者が述べれば良いと考える。まずは現代の学生自身の解釈や考えを大切にしていきたい。毎時前週の学生の自由意見を紙上に載せて授業の最初に復習するので、これらの皆の意見を踏まえて桐壺更衣の人物像理解が更に深まることを期待している。

(6)《復習》そのように造型されている理由

《a の学生の意見》

【光源氏登場に向けて】

・光源氏のキャラクター付けのための造型。・主人公である光源氏の母だから。(2名)・これから話の主役となる光源氏に感情(母を亡くしたことへの同情や応援したくなる気持ち)を抱かせるため。・『源氏物語』の主人公は光源氏であり、その母を悲劇的に描いた方が主人公を肯定的に見させることができるため。・光源氏が生まれたこ

とを肯定し、彼の境遇を明らかにすることにより、読者に彼への同情を誘うため。

・桐壺更衣の子である光源氏も他の帝の子たちに比べて特別であることを示すため。母が幼い頃に死んでしまったこともさらなる同情を誘っている。・主人公の母としていい人だという印象をつけるため。死んだ後に周囲の人たちに良い評判を言わせて読者にそう解釈させているように感じる。・この後の光源氏の華々しいストーリーをより強調するために、あえて、幼くして悲劇により母を亡くすという重くて暗い母の悲劇を書いたのではないか。・母の姿がいかに完璧であったかを説くことで、どれだけ求めても光源氏は決して満足できないことを示すため。

【悲劇の女性として】

・桐壺更衣にスポットライトを当てた作品だから。・桐壺更衣がどれだけ特別であったかを描くことで、彼女が唯一無二の存在であることに説得力をもたせるため。・楊貴妃の話からも美しい女性はそう簡単には幸せになれない。悲劇によってより桐壺更衣の美しさや人柄が引き立つようにするため。

・弱々しく守ってあげたくなる方が可愛らしく、ヒロインにふさわしいため。・「美人薄命」感を出すため。・気の強い弘徽殿女御と対比させるため。・桐壺更衣は自分から帝の愛をねだったり、他の女性の恨みをあおったりするようなこともしない。彼女が自身の境遇をどうすることもできないことやその謙虚さから同情を誘うようになっている。・物語の時代的に身分の高い人から愛さなくてはならないのにも関わらず帝が桐壺更衣を一番に愛するのは、周りの女性とは違う存在であること、周りを蹴落とさず必死になって生きている様子を描くことで桐壺更衣を目立たせるため。・歌では帝や源氏との別れを惜しんでいるという描写があり、明らかに桐壺更衣に肩入れをさせたいのではないかという雰囲気を感じたから。

【読者の期待する女性像】

・読者に好かれる人物にしたかったため。読んでいて同情されるような、読み手がひかれる人物にして『源氏物語』の最初に、もっと読みたくなる人物像を造型した。・悲劇のヒロインのように描写することで読み手を物語に引き込みやすくなるから。・物語のヒロインという立ち位置であるため、読者の同情を誘えるような儂さや愛らしさ、けなげさを表現できるような人物にしようとしたのではないか。・皆からのいじめや後ろ盾がないことが描かれ、同情して物語にのめり込みやすくなるため。・古典ではおとなしい女性の方が好感度が高い。・過去から現在の間に着された多くの物語(例えば「シンデレラ」や「眠

れる森の美女)のヒロインは、読者から見ても何か助けたいくなるような儂さやけなげさ、か弱さや愛らしさをもっているから。

【桐壺帝のため】

・桐壺更衣の優しさや弱さがより強調されていて、帝の行為を正当化するための存在にも見えるから。

【物語として】

・当時の貴族の娘は天皇の妻となることを最上の幸福としており、そんな願望をヒロインに投影した小説は人気が出ると紫式部が考えたから。・『源氏物語』は恋愛の話が目立つので、大納言家再興悲願の女性だと少しズレてしまうから。・今の時代においてもドラマや漫画で完璧な男性と少しドジであったり貧しかったりする女性が恋に落ちる展開が人気である。当時もこのような話が人気だったのではないかと。『源氏物語』冒頭で桐壺更衣が亡くなってしまったことから、恋とははかないものだと伝えたり、紫式部自身の体験を重ねたりしているのではないかと。・帝の行為自体は不倫めいていてこの時代に賞賛を浴びるようなものではないので、弘徽殿女御を悪いように見せ、桐壺更衣を良く見せることで、物語への批判を緩和するねらいがあったのではないかと。作中で悪く書かれている弘徽殿女御であるが、自分(弘徽殿女御)だったと考えると納得できる点が少なからずある。

【時代背景の投影】

・この時代の身分制社会を元にして、帝の身分を超越した愛とその愛から生まれる妬みを受けやすい人物にするため。・嫌がらせを描くことで、政治や宮中の様子を生々しく演出できるから。・当時の身分制社会を明らかにするため。・「更衣」という「女御」と格差のある女性を登場させ、低い身分だと一目で判断できるようにするため。

【平安時代の理想の女性像】

・弘徽殿女御のような人物ではなく、桐壺更衣のような穏やかで夫に尽くすような女性が理想とされていたのではないかと。・この時代の貴族女性の理想的な姿として描かれているのではないかと。

【紫式部の理想像】

・自分はこうなりたかったという理想像を書いたのではないかと。身分も関係なく、お互いに愛し合っているのならそれを尊重しようよと伝えなかったのではないかと。

【「長恨歌」の影響】

・「長恨歌」を引用して作られた巻であるため、帝に寵愛をたくさん受けた美人として書かれているため。・「長恨歌」の楊貴妃も若くして殺されてしまったため、美人＝はかないというイメージがあったのではないかと。

【李夫人や戚夫人の投影】

・帝に寵愛され一人の男子を産んで病死する場面は、楊貴妃の像と重なるだけでなく、李夫人の姿も加えて造型されている。弘徽殿女御に嫉妬されて死に至る場面は、戚夫人のことも考慮する必要がある。

《bの学生の意見》

【人生訓】

・当時ありえないような出来事が起こっていて、桐壺更衣とは逆側の人たちからしたら嫌うし、案の定いじめや嫌がらせをしていたけれど、よく言われる「天は二物を与えず」を表しているから。

《cの学生の意見》

【物語の悲劇の女性として】

・物語として桐壺更衣に良い人、良いイメージをつけたいから。弘徽殿女御らに対抗するように書くと、性格等顔以外のことで(弘徽殿女御に)似てしまいそうで、桐壺更衣を寵愛するための綺麗な人物像ではなくなってしまうから。

【紫式部の思想】

・悲劇のヒロインはあくまで彼女の性格や世の男性が好むキャラクターとして見るべきで、紫式部自身の身上が反映されているから。時代に合わない頭の良さをもった彼女の理想であり、「常識をくつがえす」ということが桐壺巻に込められた考えではないかと。

《その他》

・『源氏物語』桐壺巻では、桐壺更衣の気持ちがほとんど書かれていないため、もしかしたら桐壺更衣は寵愛を迷惑に思っていたのではないかと考えた。『源氏物語』が書かれた時代は藤原北家が権力を握っていて、紫式部は藤原氏の権勢等を高めるために書いたのではないかと考えた。書かれた理由を少し調べてみたら、紫式部は中級貴族出身であるが、藤原家の人間と結婚し、夫とは死別していることが分かった。その悲しみを忘れるために、『源氏物語』を書いたのではないかと。

授業後の課題であったが、造型理由を聞いてはじめて大学生らしい考察に行き着いた感がある。そのために自主的に調べた学生も何人か見られた。

学生は主に、作者の構想と読者への効果の2点から考えている。まず、主人公光源氏の母として読者に同情を誘う機能だけでなく、飽くなき光源氏の人物造型にまで言及している学生もいた。次に、物語のヒロインとして桐壺帝を、読者を十分に満足させる造型であるというのが挙げられる。また、時代背景の影響や作品の構想に言及している学生もいた。その他、「長恨歌」の影響や、中

国文学科生らしく「李夫人」や「戚夫人」のことを言っている学生もいたので、中国文学との読み比べには今後期待できよう。

作品の構想や読者の立場で、「なぜ、そのように造型されているのか」を考えるのは研究の醍醐味であるので、その方法やまとめ（学生の意見や指導者の考え）をきちんと提示していきたい。常に「なぜ」を問う研究、意義ある分析と考察を目指して日々精進していきたい。

(7)まとめ

①多方面から人物像を探ることについて

《自由記述》

- ・何度か読んだことがあるが、読む度に内容理解が深まっているように感じる。桐壺更衣の気持ちや行動の記述が少ないことに今回読んで気づいた。人物像を書き出すだけでも、様々な意見や書き方があり面白かった。
- ・ただ読んだ時の感情と、文章をよく分析し何のために表現がされているのかとでは大きく変化する場合があることを体感した。
- ・高校では「光る君誕生」や「若紫」などは読んだことがあったが、桐壺巻前半を詳しく読んだことがなかったのととても面白かった。また、桐壺更衣の人物像として大納言家再興悲願の女性という選択肢があるのも、今までの自分では考えられないことだったため興味深いと思った。

桐壺更衣の描写に関わる本文だけでなく、身分について、桐壺更衣の和歌、他の登場人物との比較、「長恨歌」等の他の資料との比較は、学生が多方面から考えるきっかけとなり、かつ、研究方法への理解も深まったようである。それぞれの資料に対する読解は不十分であったという反省は残るが、登場人物像を追究するための多様な方向性を示すことはできた。

②授業形態の変化について

《自由記述》

- ・予習では桐壺更衣に辛い言葉を送ってしまったが、（授業で）人間性についてより深く知ることができた。
- ・死からその背景を考えることができるのが面白い。
- ・桐壺更衣の人物像についてしっかり学べた。
- ・人物を掘り下げて考えると、更衣の良さ悪さが分かった。
- ・更衣の人物像について深く考え自分の考えをまとめ

ることができた。

- ・果たして自分の考えが合っているかは分からない。しかし、感想・考察として深めることはできた。

予習・授業・復習を通して、学生自身が考察を深めることができたと言っている。自己の読み→他者の読み→再度自己の読みというのは、確実に読みを深めさせることができる。学生のグループワークでの意見交換だけでなく、研究者らの各論を教材に載せた効果もあったと考える。

③「長恨歌」との読み比べ

《自由記述》

- ・「楊貴妃の例」とあり、「長恨歌」の内容を引用して書かれていることが分かる。
- ・桐壺更衣について、本文だけでなく長恨歌など他の文献からも読み取れることがあるので、多くの資料から読み解くことが大切である。
- ・桐壺更衣という人物を考える時に、その作品からだけでなく他の作品からも考えるということが大切だということが分かった。
- ・人物を一人一人取り上げてみると楽しい授業ができるかもしれない。途中の「楊貴妃の例」も意味があるものである。短歌は様々な見方ができる。
- ・様々な資料を読んで、自分なりの考えをもつことが楽しい。
- ・予習してきたことの外にも、先生のPPTから桐壺更衣の性格等がさらに理解できた。
- ・桐壺更衣について自分は簡単な表面的な部分しか見えていなかった。先生の説明や他の人の話を聞いて、桐壺更衣の心情等をより深く考えることができた。

不十分な読み比べではあったが、学生は『源氏物語』とのつながりや楊貴妃と桐壺更衣それぞれの人物像を対比させて考えることができていた。

④『源氏物語』への興味・関心について

《自由記述》

- ・初めての授業で心配だったけれど、時間が過ぎるのが早く感じた。
- ・新しいものの見方を得ることができた。源氏物語、もしかしたら面白いかもと思った。
- ・個人的には古典自体はとても好きなので面白かった。少し忘れていた古語の意味が丁寧に説明されていたので、とても読みやすく古典をまた読もうと思わされた。
- ・源氏物語にここまで興味をもったのは初めてかもし

れない。

古語や古文で読めなくなることがないように、現代語訳やPPTの内容を工夫した結果、学生に『源氏物語』への興味をもたせることには成功したと言える。

5. 今後の課題

(1) 「長恨歌」の読解

まず、楊貴妃の人物像をもっと明確にする必要がある。「長恨歌」での描かれ方、『源氏物語』本文での描かれ方等を読み込んで、初めて読み比べと言えよう。先行研究により挙げられた『源氏物語』桐壺巻の引用箇所と「長恨歌」とを丁寧に読み比べて、共通点と相違点、それぞれの効果について更に深く学生に考えさせていきたい。今回は「楊貴妃の政治的側面が分かるもの」として「長恨歌伝」を紹介しただけであったが、「長恨歌伝」での描かれ方に触れるのも一方法である。

(2) 桐壺更衣の歌

今回一番の反省点は、桐壺更衣の歌の読解が不十分だったことである。学生の自由記述でも、歌に言及しているものが少なかった。桐壺更衣の真の人物像を探る重要なものだが、グループワークにしたことで学生同士様々な意見を聞くことができたのは良かった。

今回は歌のみに着目させ、その心情を本文から想像させるという簡略化した形をとった。しかし、「いとかく思ふ給へましかば」や「聞えまほしげなる事はありげなれど」も含めて、桐壺更衣の心情に迫るべき箇所はある。また、桐壺帝の言葉やその後の歌等、贈答か独詠かという問題もある。それらを一つ一つ取り上げて、深く読み込ませていきたい。

(3) グループワークについて

いつもはPPTを使つての自己紹介が一通り済んだ後にグループワークを行っているのだが、今回は初対面同様の状態で（今年度の3年生は2年間オンライン等の授業が主流）、授業への温度差や話し合いへの苦手意識もある中で、よくぞ話し合ってくれたという感謝しかない。ペア・グループワークは事前に人間関係のある程度良好に保つ（自分の考えを気軽に述べ話し合いができる）雰囲気や安心感が必要であるので、今後は慎重に進めていきたい。

ただ先行研究を挙げるだけでなく、大学生にふさわしい思考の深まりや論の組み立てを追究する授業でなくてはならない。今後様々なアイスブレイクを踏まえた、様々な協働学習のあり方を追究していくつもりである。

注

- 1 世羅博昭「『源氏物語』の学習指導（その三）―「桐壺」の巻の授業を取り上げて―」（広島大学附属中高等学校）『『源氏物語』学習指導の探究』溪水社 1989年
- 2 信木伸一「対立構造に着目した物語の読みの授業―源氏物語「桐壺」の授業から―」（広島大学附属福山中高等学校）広島大学教育学部光葉会「国語教育研究」37 1994年3月
- 3 保戸塚朗「『源氏物語』「桐壺」冒頭の授業」（東京都立日比谷高等学校）東京大学国語国文学会「国語と國文学」2015年11月
- 4 荒居勝弘「思考力・判断力・表現力の育成を目指した国語科の授業の展開―アクティブ・ラーニング型の授業を通して―」（栃木県立栃木工業高等学校）栃木県総合教育センター「教師のための 教材研究のひろば」（栃木県教育研究発表大会）国語部会 2016年1月29日
- 5 兼坂壮一「男子校における源氏物語講義―純愛物語？としての桐壺の巻―」（法政大学第一中高等学校）「高校国語教育臨時増刊号」三省堂 2016年12月
- 6 河添房江「『源氏物語』で「深い学び」はいかにして可能か―桐壺巻・若紫巻における古典教育と研究の協働―」中古文学会「中古文」106 2020年11月
- 7 板東智子「教養教育における古典授業の開発(1)―7枚の源氏絵で読む源氏物語―」山口大学教育学部研究論叢 70 2021年1月
- 8 松岡礼子「マルチモーダル・アプローチを活かした文学の学習指導」大阪教育大学紀要 総合教育科学 69 2021年2月
- * 「マルチモーダル」複数の、複数の形式の、複数の手段による（デジタル大辞泉）
- 9 三谷邦明「桐壺―源氏物語の方法的出発点として―」『源氏物語講座 第三巻』有精堂 1971年
- 10 吉海直人「研究史―人物論覚書」人物で読む源氏物語第一巻『桐壺帝・桐壺更衣』室伏信助監修 上原作和編集 勉誠出版 2005年
- 11 増田繁夫「女御・更衣・御息所の呼称―源氏物語の後宮の背景―」『平安時代の歴史と文学 文学編』山中裕編 吉川弘文館 1981年
- 12 神尾暢子「作品作者の美的規定―更衣桐壺との美的創造―」『王朝語彙の表現機構』新典社 1985年
- 13 玉上琢彌「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御―源氏物語の本性（その四）―」『源氏物語評釈 別巻一』角川書店 1966年

- 14 三谷邦明「桐壺—源氏物語の方法的出発点として—」『源氏物語講座 第三卷』有精堂 1971年
 (他に同様の解釈を述べる論文を挙げる。以下同じ)
 ○上野英二「長恨歌から源氏物語へ」『源氏物語の視界1 (準拠と引用)』王朝物語研究会編 新典社 1994年
 ○池田勉「源氏物語「桐壺」の作品構造をめぐって」『日本文学研究資料叢書 源氏物語I』有精堂 1969年
- 15 三田村雅子「(方法)語りとテキスト 実例『源氏物語』」『国文学 解釈と教材の研究』36-10 學燈社 1991年9月
- 16 藤井貞和「光源氏物語の端緒の成立」『源氏物語の始原と現在』三一書房 1972年
- 17 河村幸枝「桐壺更衣哀史と長恨歌—「楊貴妃の例」その政治性と浪漫性—」『国語・国文・国語教育 解釈 特集 集中古』40-7 解釈学会編 1994年7月
- 18 高橋亨「闇と光の変相—源氏物語の世界」『源氏物語の対位法』東京大学出版会 1982年
- 19 新聞一美「李夫人と桐壺卷」『論集日本文学・日本語2 中古』坂倉篤義監修 角川書店 1977年
 *新聞一美氏は、「長恨歌」は反魂香(焚けば死人の魂を呼び返しその生前の姿が煙の中に現れるといわれる想像上の香。返魂香とも)で有名な漢の武帝の寵姫李夫人の故事をもととして書かれたことはよく知られている、という。「桐と長恨歌と桐壺卷—漢文学より見た源氏物語の誕生—」『甲南大学紀要 文学編』48 1983年3月
- 20 田中隆昭「源氏物語の歴史の引用から長編物語の創造へ—『長恨歌』『長恨歌伝』引用から始まる日本の虚構の宮廷史—」『源氏物語引用の研究』勉誠出版 1999年
 ○袴田光康「『源氏物語』における「長恨歌伝」の研究—「桐壺」巻篇其の1(付 金沢文庫本「長恨歌伝」)—」『源氏物語』における「長恨歌伝」の研究—「桐壺」巻篇其の2—」『文芸研究』91-94 明治大学文芸研究会 2003年9月、2004年9月
- 21 陳明姿「『源氏物語』における「長恨歌」の機能」『輔仁大学 日本語日本文学』24 輔仁大学外語学院日本語文学系 1998年7月
 *陳明姿氏は、『源氏物語』全体において「長恨歌」「長恨歌伝」の引用を調査した結果、「長恨歌伝」的な教訓性・風刺性の例は一つもなく、「長恨歌」的な叙情性・感傷性、特に愛を喪失した玄宗皇帝の悲嘆思慕が強調されており、「長恨」という主題、玄宗皇帝の悲しみ・寂しさを桐壺帝、源氏、薫の哀嘆・追慕に投影させた、という。
- 22 小町谷照彦「源氏物語の和歌」『源氏物語講座 第一卷』有精堂 1971年
- 23 武谷恵美子「桐壺更衣考—別るる道のかなしき—」『筑紫女学園短期大学紀要』30 1995年1月
- 24 秋本宏徳「桐壺更衣の和歌」『成蹊国文』34 2001年3月
- 25 藤井貞和「神話の論理と物語の論理—源氏物語遡行—」『日本文学』1973年1月
- 26 秋山虔「桐壺更衣」『源氏物語の女性たち』小学館 1987年
- 27 上野辰義「桐壺更衣の造形と人間像—「いとかく思うたまへましかば」の解釈を中心に—」『国語国文』64-6730 号京都大学文学部国語学国文学研究室編 中央図書 1995年6月
- 28 吉海直人「桐壺更衣の再検討」『源氏物語の視覚』翰林書房 1992年

《参考文献》

- ・丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学会 1964年
- ・益田勝実『火山列島の思想』筑摩書房 1968年
- ・鈴木一雄監修／神作光一編集「源氏物語の鑑賞と基礎知識 NO.1 桐壺」至文堂 1998年
- ・新聞一美『源氏物語と白居易の文学』和泉書院 2003年
- ・日向一雅 仁平道明編『源氏物語の始原—桐壺卷論集』竹林舎 2006年
- ・日向一雅編『源氏物語と漢詩の世界 『白氏文集』を中心に』青簡舎 2009年
- ・中西進著作集17『源氏物語と白楽天』四季社 2011年
- ・仁平道明編『源氏物語と白氏文集』新典社 2012年